ChatGPT

「藤原道真」という語はなぜ生まれたのか

エグゼクティブサマリー

結論から言えば、歴史上の当人は**「藤原道真」ではなく、史料上ほぼ一貫して「菅原朝臣道真」あるいは近代以降の略式で「菅原道真」**と呼ばれる。『日本三代実録』の編者表示や同時代の官司記事は、成人後の公的標識として「菅原朝臣道真」を用いており、「藤原」の氏を当人に付す一次史料は、今回確認した公開範囲では見いだせない。他方で、近年の教育出版物には「藤原道真」を誤記として訂正した実例があり、これは**現代的な誤複合語**としての生成を示す重要な傍証である。つまり本件は、古代日本の氏姓名の成立史を問う問題であると同時に、**なぜ近現代に誤って「藤原＋道真」が結び付いたのか**を問う問題でもある。 [1]

道真の名乗りは、単純な「姓＋名」ではなく、古代の**氏（うじ）・姓（かばね）・個人名**の三層構造に乗っていた。菅原氏は、もと土師宿禰であった一族が天応元年（781）に居地名にちなみ「菅原」へ改姓し、延暦九年（790）には「朝臣」を賜って成立した。したがって、道真の成人後の史料的フルネームは「菅原朝臣道真」であり、現代の「菅原道真」はこれを近代的姓名感覚で縮約した形と理解するのが適切である。さらに公開辞典・研究には、道真について「字は三」「幼名は阿呼（阿古）」と伝えるものもあり、**「三」「阿呼」「道真」**という複数の名の層位が存在したことがわかる。 [2]

「道真」の二字は、漢字義から見れば「道＝みち・道理・学問の道」「真＝まこと・真実」に開かれているが、**具体的にこの意図で命名したと明言する同時代史料は確認できない**。したがって、字義解釈は一定程度まで推論である。ただし、平安貴族社会では抽象的・徳目的な字が人名に好まれ、また「さね／ざね」に連なる名乗りは貴族名・中世名に広く見られるため、「道真」を「みち＋ざね」と読むこと自体は名付けの慣習に十分適合する。さらに、生前は「菅原朝臣」「右大臣」「菅丞相」といった官職・尊称が、死後は「天満天神」「北野天満大自在天神」といった神号が前面に出た。この呼称変化は、藤原氏との政争、配流、復官、怨霊鎮祭、北野社創建、勅祭化という政治・宗教・文化の連鎖の中で定着した。 [3]

以上を総合すると、「藤原道真」という語が生まれた理由は、**本来の人名成立史そのもの**ではなく、①古代の氏姓制度が現代には見えにくくなったこと、②「菅原の道真」「藤原の時平」のように物語の中で並置される両者が、近代的な姓名感覚ではともに「苗字＋名」に見えること、③道真の没落が藤原氏の権力史と強く結び付いて記憶されたこと、④教科書・ウェブ・展示解説などでの入力・編集ミスが検索空間で再生産されたこと、の複合作用による**誤情報の語彙化**だと考えるのが最も蓋然的である。 [4]

史料上の前提と人名成立の骨格

まず確認すべきは、調査対象人物の**史料的正称**である。公開されている『日本三代実録』の書誌情報は編者の一人を「菅原／朝臣／道真」と示し、香川県埋蔵文化財センターが引用する仁和二年正月十六日条も「菅原朝臣道眞為守」と記す。少なくとも官界・実録世界では、成人後の当人は「菅原朝臣道真」であって、「藤原道真」ではない。近代辞典類も標準項目名を「菅原道真」とする。 [5]

菅原氏そのものは、もと**土師宿禰**であった一族が改姓して成立した。九世紀改姓史を扱った研究は、『続日本紀』天応元年六月壬子条に見える請願文を引用し、土師宿禰古人らが**「因二居地名一、改二土師一以為二菅原姓一」**と願い出て許されたと示す。現代語に直せば、「居住地の名によって土師を改め、菅原の姓（ここでは氏名）としたい」という趣旨である。これにより、道真の「菅原」は**道真個人の創作名ではなく、家の氏名として一世紀近い先行史を持つ**ことがわかる。 [6]

ついで延暦九年（790）には、「**並賜姓朝臣**」とあるように、菅原・秋篠・大枝の三氏に「朝臣」の姓（かばね）が下賜された。研究上も、これによって「菅原朝臣」を自称する氏族単位が成立したと説明される。現代の姓名観では見えにくいが、古代名「菅原朝臣道真」は、**氏＝菅原、姓＝朝臣、個人名＝道真**という三層構造である。

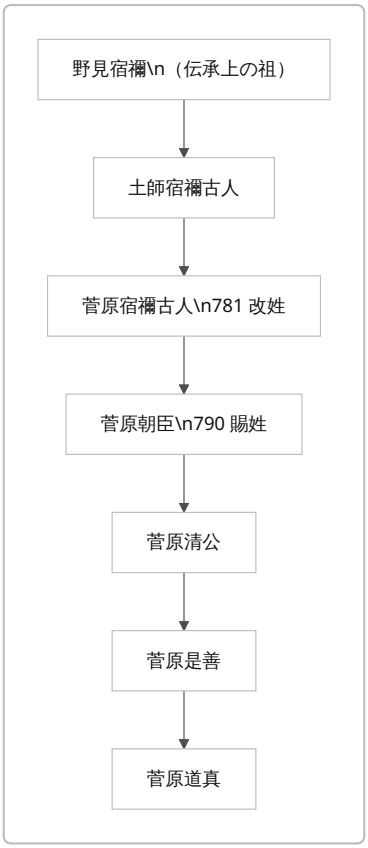
同時に、古代の個人名は社会的地位によって多層化していた。人名史研究は、古代人の名前には幼名・実名・通称・字・法名・諡など複数層があり、しかもそれらは**身分表示の役割**を担っていたと整理する。道真の場合も、公開辞典や研究が「幼名は阿呼（阿古）」「本名あるいは字は三」と伝える一方、公的史料では「道真」が用いられる。したがって、**「道真」は少なくとも成人後の公的・外向的名乗りとして固定し、「阿呼」「三」は別層の私的・伝承的名**として理解するのが最も安全である。ここにはなお整理すべき問題が残るが、少なくとも「藤原」が入り込む余地は史料上ない。 [7]

下表は、道真の名称構造を、史料・辞典に即して整理したものである。

層位	道真の場合	史料・辞典上の根拠	分析上の意味
氏	菅原	781年に土師から菅原へ改姓。『続日本紀』請願文「因二居地名一、改二土師一以為二菅原姓一」 [6]	家・氏族を示す要素
姓	朝臣	790年に「並賜姓朝臣」	律令国家の身分秩序を示す要素
成人後の公的名乗り	道真	『日本三代実録』記事「菅原朝臣道眞為守」／編者表示「菅原朝臣道真」 [8]	官司・実録で実際に機能した標識
伝承される本名・字	三	「字は三」あるいは「本名は三」 [9]	公名とは別層の名が伝えられている
幼名	阿呼・阿古	「幼名は阿呼（阿古）」 [9]	元服以前の呼称
近代以降の略式	菅原道真	氏姓複合の省略形として現代に定着 [10]	「の」「朝臣」を脱落させた近代的表記
近現代の誤複合	藤原道真	学研の正誤表で「誤 藤原道真／正 菅原道真」 [11]	現代の誤記・誤学習の産物

史料上、「藤原氏内での位置」を示すことはできない。そこで、道真の**実際の位置**である菅原氏内の系譜を示す。

道真は、伝承上は野見宿禰の後裔で、史料的には土師宿禰古人の改姓後に成立した菅原氏に属し、祖父清公・父是善と続く**学者官人の家**に生まれた。山川日本史小辞典は、菅原氏について「大江氏と並ぶ学者の家」と位置づける。 [12]



この系図は、781年改姓記事、790年賜姓記事、ならびに清公・是善・道真の辞典項目に基づく要約図である。したがって、**「藤原道真」は系譜学的にも制度史的にも成立しない**。 [13]

「道真」の字義・読み・表記の歴史

「道真」の二字を分解すると、**道**は「みち・道理・方法・学問や技芸の道」を、**真**は「まこと・ほんとう・真実」を基本義とする。漢字教育辞典レベルの字義にとどめても、「道」は通路だけでなく守るべき道や学藝の道を含み、「真」は真実・純真を指す。したがって、「道真」は後世の感覚からみれば「学問の道における真」「道理にかなう真実」といった美称的解釈を許す名である。もっとも、**命名時の意図を直接述べる同時代史料は確認できない**ため、この字義説明はあくまで字書から逆照射した分析である。 [14]

読みについては、**道＝みち、真＝ざね**で「みちざね」となる。前半の「みち」は「道」の訓読から自然に説明できるが、後半の「ざね」は現代語幹だけでは見えにくい。ここで参考になるのが、人名における**さね／ざね**系列の広い生産性である。平安貴族には藤原実頼（さねより）、藤原公実（きんざね）、徳大寺実能（さねよし）のような例があり、中世以降には助真（すけざね）、正真（まさざね）、貞真（さだざね）など、**「真」を「ざね」と読む名乗り**も確認できる。したがって、「道真」の終止要素は孤立例ではなく、日本語人名の名乗り体系に十分な先例がある。 [15]

表記史の面では、古代人名は現在の「苗字＋名前」とは異なり、しばしば**「菅原の道真」**のように「の」を介して読まれた。福井県文書館の解説も、「藤原『の』道長、菅原『の』道真、源『の』頼朝」のように、古代・中世の「姓」は「の」を伴うと説明する。したがって、現代の「菅原道真」は、古層の「菅原の道真」「菅原朝臣道真」から「の」と「朝臣」を落とした**近代的圧縮表記**である。 [16]

さらに文学作品では、必ずしもフルネームが出ない。早稲田大学の研究によれば、『古今和歌集』では道真歌の作者表記は**「すがはらの朝臣」**であり、これは異例の扱いとして研究対象化されている。つまり、同時代から近接する文芸空間では、個人名「道真」よりも**氏姓・尊称の側が前景化**しやすかった。ここからも、

「道真」が単独で知られるようになる過程には、神格化・伝承化を含む後代の文化史が深く関与していたことがわかる。 [17]

生前から死後神格化までの呼称変遷

道真の呼称は、生前の官司的名乗り、没後の尊称、さらに神号へと段階的に変化した。まず官司・実録では「菅原朝臣道真」が基本形である。仁和二年に讃岐守に任ぜられた記事は「**菅原朝臣道眞為守**」と記し、これは氏・姓・個人名がそろった完全形である。成人後の公的人物としての道真は、この形で国家記録に登録されていた。 [18]

一方、後世に広まったのは、官職や徳望に由来する尊称である。辞書類は「菅公」「菅丞相」をいずれも道真の異称とする。「丞相」は大臣級の唐名であり、道真が右大臣に至ったことと結び付く。生前の最高官職が、そのまま記憶の中で固有名化したのである。日本大百科・国語辞典系の項目も、道真について「後世菅公と尊称された」と要約する。 [19]

左遷後は、呼称変化に政治的事件が重なる。『日本三代実録』序文の伝本には、編纂途中の事情として「**右大臣道真朝臣坐事左降**」とあり、右大臣道真朝臣が事件に坐して左降したと回顧する。さらに延長元年（923）の復官記事については、神社本庁の史料紹介が「**故従二位大宰権帥菅原朝臣、本官、右大臣に復す。兼ねて、正二位を贈る**」と引用する。ここでは「大宰権帥」という左遷先の官名と「右大臣」という旧官が交錯し、**被害者としての記憶と名誉回復の記憶**が同時に形成されている。 [20]

神格化の段階では、人間名よりも神名が前景化する。北野天満宮の公式年表は、947年創建、987年に一条天皇から「天満大自在天神」の神号を賜り、993年に正一位・太政大臣が追贈されたと整理する。京都国立博物館の2025年プレス資料も、道真は当初怨霊として畏怖されたが、しだいに善神化し、987年に「北野天満大自在天神」の神号を贈られたと説明する。さらに国語辞典は「天満天神」の初出例として『政事要略』の「**其後号二天満天神一。庶人皆帰之**」を挙げる。ここで道真は、もはや人間の諱よりも**神霊の名**で記憶されるようになった。 [21]

この変遷を一望すると、道真の呼称史は「幼名・私的名」から「官司名」「官職由来の尊称」「神号」へと重心を移している。公開史料群で目立つのは、法名よりもむしろ**国家文書・官職・神号**に由来する呼び名である。つまり道真の名は、仏教的個人救済の名より、**政治的名誉の回復と御霊鎮祭の必要**によって書き換えられた。 [22]

下表に、主要呼称の変遷をまとめる。

時期	主な呼称	典拠	文脈
幼少期	阿呼・阿古	辞典・研究が「幼名」として伝える [9]	元服以前の名
伝承上の本名・字	三	「字は三」「本名は三」 [9]	私的・伝承的な名の層
生前の公的成人名	菅原朝臣道真	『日本三代実録』記事・編者表示 [8]	官司・実録での正式標識
生前の職名的呼称	右大臣	序文「右大臣道真朝臣坐事左降」 [23]	官位による識別
後世の尊称	菅公・菅丞相	各種辞典 [24]	学徳・官位に基づく敬称

時期	主な呼称	典拠	文脈
復官後の追想	元の右大臣・正二位	923年復官記事引用 [25]	名誉回復
神霊名	天満天神	『政事要略』初出例 [26]	御霊・神霊としての定着
神号	北野天満大自在天神	987年神号授与 [27]	勅祭化・国家神格化
現代の敬称	菅原道真公	太宰府天満宮・北野天満宮の公式用法 [28]	神社祭祀・顕彰

政治的・文化的要因と「藤原道真」誤称の生成

道真の名が強く定着した背景には、**藤原氏との対抗関係**がある。山川系辞典は藤原時平について、宇多天皇が時平と寵臣菅原道真に政務を任せ、899年に時平が左大臣となり、901年に右大臣道真を左遷したと要約する。他方、菅原氏は「大江氏と並ぶ学者の家」ではあっても、摂関家のような外戚家格は持たない。つまり、道真の上昇と転落は、**学者官人の異例の栄進が藤原氏の家格秩序にぶつかった事件**として記憶された。[29]

その後の名の定着は、配流・復官・神格化を通して進む。923年の復官、947年の北野社創建、987年の神号授与、993年の太政大臣追贈という一連の出来事は、道真の名を単なる政争の被害者名から、国家が鎮めるべき**御霊名・神名**へと転化した。ここで重要なのは、記憶の主体が個人の家から朝廷・神社・勅祭へ広がったことである。名が官府・祭祀・文芸に乗るほど、表記は固定し、流布力は増大する。[30]

では、なぜその道真が近現代に「藤原道真」と誤記されるのか。ここは史料が直接説明するわけではないため、以下は**総合仮説**である。第一に、古代人名の「氏＋の＋名」という構造が、近代以降に「苗字＋名前」へ再解釈された。福井県文書館の解説が示すように、本来は「菅原の道真」「藤原の時平」である。第二に、道真説話は藤原時平との対立抜きには語られにくく、教育現場でも「藤原氏の時代」「藤原時平の讒言」とセットで記憶される。第三に、その連想の近接が、入力・編集の場で「藤原＋道真」という**交差汚染**を起こしやすい。学研が2022年に「誤 藤原道真／正 菅原道真」と訂正した事実は、その種の誤複合が現実に流通していることを示す。[31]

したがって、「藤原道真」は古代の命名制度から生まれた語ではなく、むしろ**古代の命名制度が忘れられた結果として生まれた近現代語**とみるべきである。言い換えれば、「菅原朝臣道真」という複層的な古代人名が、現代の単層的姓名モデルに押し込まれ、その周囲に常にいた「藤原」要素が誤って吸着したのである。[32]

比較事例と研究史

同名・類似名の比較

「道真」という二字そのものは、公開辞典で最も著名なのが道真本人である一方、**後半要素「さね／ざね」**はきわめて広く分布する。平安貴族には藤原実頼（さねより）、藤原公実（きんざね）、徳大寺実能（さねよし）があり、「実」がさね／ざね系列を担う。中世・近世には助真（すけざね）、貞真（さだざね）、正真（まさざね）などが見え、「真」もまた人名語尾としてざね読みを取りうる。つまり、道真の特異性は「ざね」そのものにあるのではなく、**前要素「道」と結び付いて強い記号性を帯びた点**にある。[15]

この比較から導けるのは、道真の名が二重の意味で成功していたということである。音韻的には既存の日本人名体系に馴染み、意味的には「道」と「真」の徳目性が高い。だからこそ、本人の政治的・文化的名声と結び付いた後、**「みちざね」という音形は一個人を超えて象徴化**しやすかった。道真の名は、珍奇だから残ったのではなく、むしろ**古典的でよくできた名**だったから残ったと言える。 [33]

研究史の変遷と主要論点

近代以降の道真研究は、長く**忠臣・詩人・受難者**としての伝記的理解に重心を置いてきた。京都産業大学の所功は、自身の研究史回顧の中で、坂本太郎の人物叢書以来の伝記研究の大きさを認めつつ、近年は「道真の実像」を、単なる学者ではなく政策通・行動家として描く方向が強まったと述べる。また、同じ回顧は、「和魂漢才」が道真自身の語として流布したのは幕末以降で、江戸中期以前には遡りにくいと指摘する。これは、**近代の道真像が後代の倫理語によって再構成されてきた**ことを意味する。 [34]

政治史研究では、道真が関与した事件のうち、**阿衡紛議と遣唐使停止建議に研究が集中**してきたことが指摘される。他方、近年の研究紹介は、道真を「学者政治家」よりむしろ**紀伝道出身の官僚**として捉える視点を強調する。東京大学学位論文要旨の紹介は、道真の構想として、中央政務に携わる〈貴族〉に厳しい教養・法解釈能力を求める「二階層の貴族制」を読み取っており、これは道真を受難の文人ではなく**制度構想の担い手**として評価する動きである。 [35]

文学史・信仰史の分野では、近年、『古今集』『後撰集』『拾遺集』における作者表記や説話化の差異を精査し、**道真像の変容を段階的に追う研究**が進んでいる。早稲田大学の研究は、『古今集』における「すがはら朝臣」という作者表記の異例性と、後代の道真像・天神信仰との関係を問題化する。ここでは「怨霊だから載った／載らなかった」といった単純図式ではなく、**勅撰集ごとの編集状況と時点ごとの道真像**が分析の焦点になる。 [17]

なお、未解決問題としては少なくとも三つある。第一に、**「三」と「道真」の関係**である。公開辞典・研究には「字は三」「本名は三」とするものがある一方、同時代官司史料は「道真」を用いる。第二に、左遷事件の**責任主体の比重**で、時平・醍醐・宇多院政の関係はなお議論の余地がある。第三に、道真の名の定着がどの時点で「人間名」から「神霊名」へ比重を移したかという問題である。つまり、道真研究はもはや単なる伝記ではなく、**人名論・政治史・文学史・宗教史が交差する学際領域**になっている。 [36]

主要一次史料年表

年代	史料名	該当箇所・短い引用	現代語訳・意味
781-06-25	『続日本紀』天応元年六月壬子条	**「因二居地名一、改二土師一以為二菅原姓一」** [6]	「居住地名によって土師を改め、菅原としたい」。菅原氏成立の原点。
790-12-30	『続日本紀』延暦九年十二月三十日条	**「並賜姓朝臣」**	菅原氏が「朝臣」の姓を賜る。以後「菅原朝臣」が正式形となる。
886-01-16	『日本三代実録』仁和二年正月十六日条	**「菅原朝臣道眞為守」** [18]	讃岐守任官記事。成人後の公的名乗りが「菅原朝臣道真」であることを示す。
901以後を回顧	『日本三代実録』序文伝本	**「右大臣道真朝臣坐事左降」** [23]	右大臣道真朝臣が事件により左降した、と序文が回顧。左遷後も「道真朝臣」という標識は保持される。

年代	史料名	該当箇所・短い引用	現代語訳・意味
923-04-20	延長元年復官記事（史料紹介による引用）	**「故従二位大宰権帥菅原朝臣、本官、右大臣に復す」** [25]	左遷された道真を元の右大臣に復し、正二位を贈る。名誉回復の制度的表現。
1002頃	『政事要略』巻二二	**「其後号二天満天神一。庶人皆帰之」** [26]	「その後、天満天神と号し、人々はみなこれに帰依した」。人間名から神霊名への定着を示す。
987を伝える史実整理	北野社関係史料の現代整理	一条天皇から**「北野天満大自在天神」**の神号授与 [27]	国家祭祀の中で、道真の神号が固定される。一次史料そのものの翻刻ではないが、主要史実の整理として重要。

結論

以上の検討から、**「藤原道真」という単語は、古代日本における正規の人名成立の結果ではなく、近現代に生まれた誤複合語**と結論づけられる。歴史上の当人の公的名称は「菅原朝臣道真」であり、その成立には、781年の菅原改姓、790年の朝臣賜姓、そして成人後の官司記録における「道真」の固定という、律令国家の氏姓制度に基づく長い前史がある。これに対して「藤原」は、当人の氏ではなく、むしろ政敵の藤原時平や当時の支配氏族として**周辺に強く存在していた別要素**である。 [37]

そのうえで、なぜ誤って「藤原道真」が生まれたのかを総合仮説として述べれば、次のようになる。古代名の構造である「菅原の道真」が、近代以降の「苗字＋名」モデルの中で理解し直されたとき、物語の中でつねに隣接していた「藤原の時平」「藤原氏の時代」という強い記憶が、道真の名の前半に誤吸着した。しかも道真は、復官・追贈・天神化を通じて名の知名度が非常に高く、後半要素の「道真」だけでも広く通じる。前半要素の取り違えが起こったとき、誤りはすぐ検出されず、教科書付録やウェブ記事の誤記として流通しやすい。学研の正誤表は、そのメカニズムが現実に作動したことを示す。したがって、「藤原道真」という語が生まれた理由は、**藤原氏と道真の歴史的近接そのもの**ではなく、**その近接を現代人が古代の氏姓制度を見失ったまま再解釈したこと**にある。これが、本報告の最終的な結論である。 [38]

---

[1] [5] https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/300095261
https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/300095261

[2] [6] [13] [37] https://k-rain.repo.nii.ac.jp/record/977/files/kokushigaku_230_002.pdf
https://k-rain.repo.nii.ac.jp/record/977/files/kokushigaku_230_002.pdf

[3] [14] [33] https://www.kanjipedia.jp/kanji/0005273900
https://www.kanjipedia.jp/kanji/0005273900

[4] [10] [16] [31] [38] https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/bunsho/file/701181.pdf
https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/bunsho/file/701181.pdf

[7] [22] [32] https://www.obirin.ac.jp/academics/postgraduate/international_studies/course_humanities/papers_doctoral/r11i8i000001ckzq-att/BC-2-1-5-2-4_02.pdf
https://www.obirin.ac.jp/academics/postgraduate/international_studies/course_humanities/papers_doctoral/r11i8i000001ckzq-att/BC-2-1-5-2-4_02.pdf

[8] [18] https://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/maibun/sanukikokuhu/s-michizanenoashiato.html
https://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/maibun/sanukikokuhu/s-michizanenoashiato.html

9 36 https://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/files/public/4/49118/20160528095339657884/K0004662_honbun.pdf
https://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/files/public/4/49118/20160528095339657884/K0004662_honbun.pdf

11 https://hon.gakken.jp/info/n202205230117
https://hon.gakken.jp/info/n202205230117

12 https://kotobank.jp/word/%E8%8F%85%E5%8E%9F%E6%B0%8F-83471
https://kotobank.jp/word/%E8%8F%85%E5%8E%9F%E6%B0%8F-83471

15 https://kotobank.jp/word/%E8%97%A4%E5%8E%9F%E5%AE%9F%E9%A0%BC-124631
https://kotobank.jp/word/%E8%97%A4%E5%8E%9F%E5%AE%9F%E9%A0%BC-124631

17 waseda.jp
https://www.waseda.jp/flas/glas/assets/uploads/2022/02/MITARAI-Yasuhiro_0912-0894.pdf

19 24 https://kotobank.jp/word/%E8%8F%85%E4%B8%9E%E7%9B%B8-470214
https://kotobank.jp/word/%E8%8F%85%E4%B8%9E%E7%9B%B8-470214

20 23 https://miko.org/~uraki/kuon/furu/text/sandai/sdj00.htm
https://miko.org/~uraki/kuon/furu/text/sandai/sdj00.htm

21 https://kitanotenmangu.or.jp/related-organizations/kitano-bunka/
https://kitanotenmangu.or.jp/related-organizations/kitano-bunka/

25 30 https://jinja-net.jp/jinja-shi/siryou/mitizane.pdf
https://jinja-net.jp/jinja-shi/siryou/mitizane.pdf

26 https://kotobank.jp/word/%E5%A4%A9%E6%BA%80%E5%A4%A9%E7%A5%9E-679100
https://kotobank.jp/word/%E5%A4%A9%E6%BA%80%E5%A4%A9%E7%A5%9E-679100

27 https://kitanotenmangu.or.jp/story/%E5%A4%A9%E7%A5%9E%E3%81%95%E3%81%BE%E3%81%A8%E5%BE%A1%E7%A5%9E%E5%8F%B7/
https://kitanotenmangu.or.jp/story/%E5%A4%A9%E7%A5%9E%E3%81%95%E3%81%BE%E3%81%A8%E5%BE%A1%E7%A5%9E%E5%8F%B7/

28 https://www.dazaifutenmangu.or.jp/about/sugawaranomichizanekou
https://www.dazaifutenmangu.or.jp/about/sugawaranomichizanekou

29 https://kotobank.jp/word/%E8%97%A4%E5%8E%9F%E6%99%82%E5%B9%B3-124662
https://kotobank.jp/word/%E8%97%A4%E5%8E%9F%E6%99%82%E5%B9%B3-124662

34 https://www.kyoto-su.ac.jp/lib/tosyo/pdf/lib30-1-Author.pdf
https://www.kyoto-su.ac.jp/lib/tosyo/pdf/lib30-1-Author.pdf

35 https://teapot.lib.ocha.ac.jp/record/6744/files/P251-256.pdf
https://teapot.lib.ocha.ac.jp/record/6744/files/P251-256.pdf